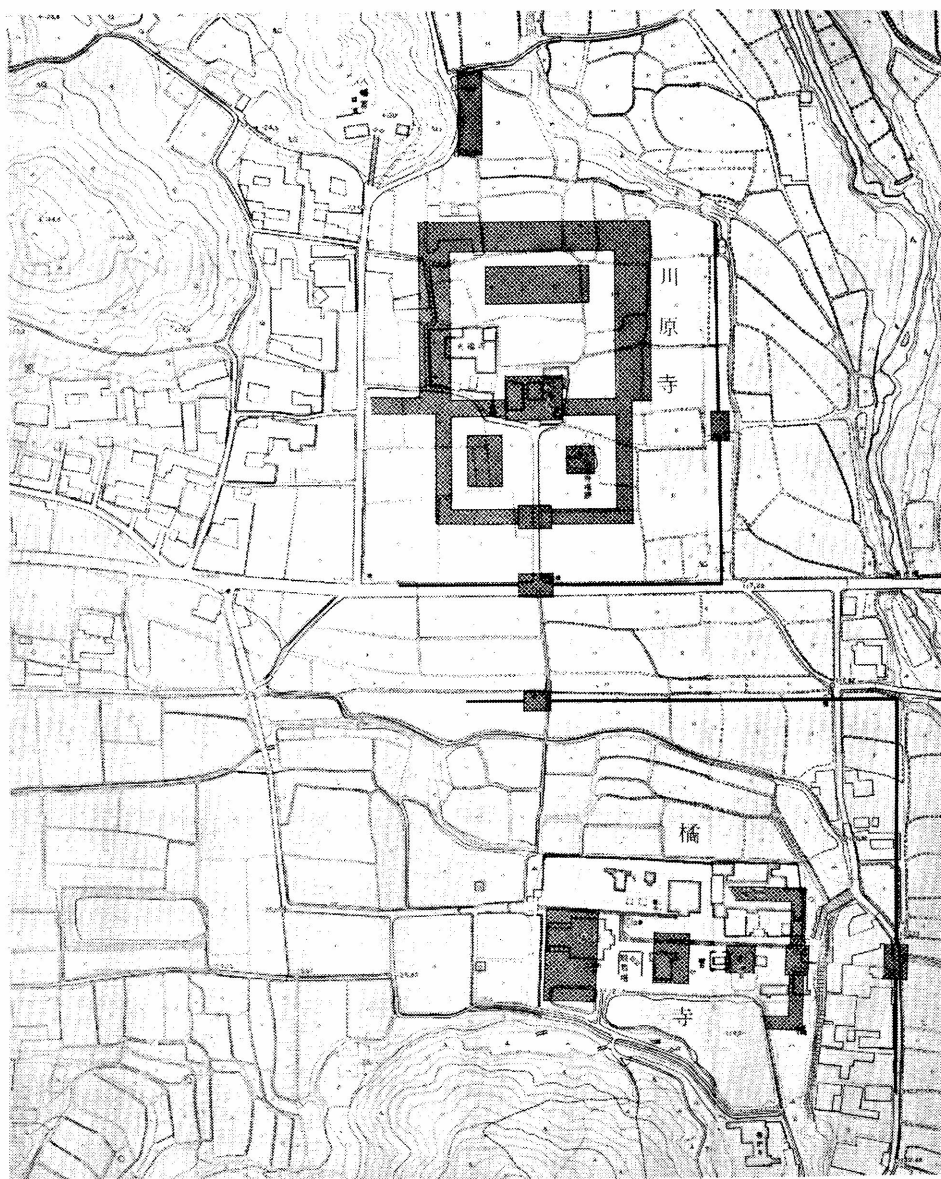


川原寺第三次発掘調査概要

建造物研究室・建築
歴史研究室・考古

川原寺第三次発掘調査概要

第1図 川原寺・橋寺図



昭和32年度より行っている川原寺の発掘調査は、予期以上の成果をおさめてわが国上代寺院史研究に重要な資料を加えつつあるが、先の第一次及び第二次調査に引き続いて、昭和33年11月15日より昭和34年3月9日まで、約百日を費して第三次調査が行われた。先の調査に関しては、すでにその概要を58年度年報に簡単に報告したが、更にその後の調査を合わせていづれ詳細な報告書を刊行する予定である。出土遺物の整理等には、現在なおかなりの日数を要するので、ここでは第三次の調査で新に発見された遺構を主として記し、今回の調査の概要を報告する。

先の第一次及び第二次調査によつて南大門、中門、回廊、中金堂、東塔及び西金堂等の遺構を発掘し、南門より中金堂に至るいわば金堂院とでもいうべき伽藍の中核部を明らかにすることが出来た(第3図)。その結果、従来からも一部では推定されていたことではあるが、中金堂の南庭の東に塔、西に仏殿を対置し、中門から発した回廊がそれらを取囲むという、前例を見ない伽藍配置を確め得たのであつて、その意義は誠に大なるものと信ずる。今回はそれに引き続きその北方、講堂院に当る附近を主として調査し、講堂及び僧房を明らかにした。また中金堂両脇の回廊及びその西端から西へ延びる渡廊等も合せて調査した。

一 講 堂

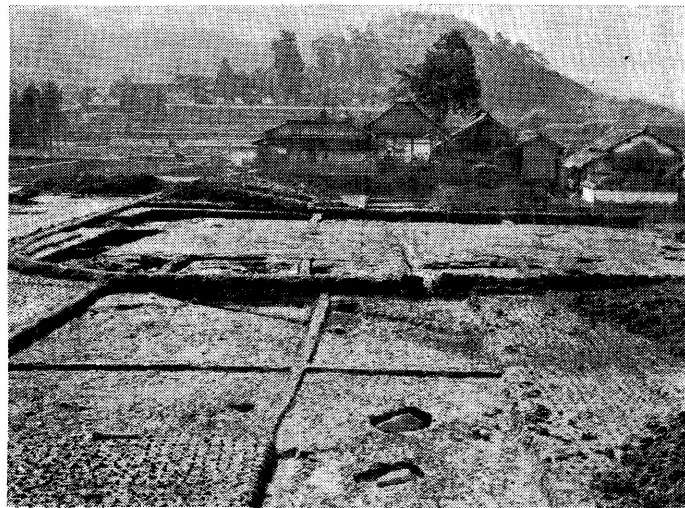
中金堂の北48m(158.7尺)に東西41m(135.5尺)、南北16m(52.7尺)の基壇地かためをもつ講堂が存したことが確認された。講堂の上

部は完全に削平されて(第2図)地上には全く何等の遺構を残さな

いまでになつていたが、こ

こでも第一、二次の調査で判明した伽藍南半同様の埋立た土の上に遺構が造営されていた。基壇地かためは、前記の寸法でこの盛土上面を深さ約0.5mほど掘り、これに径30~40cmの玉石を敷きつめたもので、この上に厚さ3cmほどに叩き固めた土層が15層くらいみられたが、これは明らかに基壇構築のための築土層で、第二次調査の時の塔址の例や西大寺東西両塔などと同様の手法を示している。

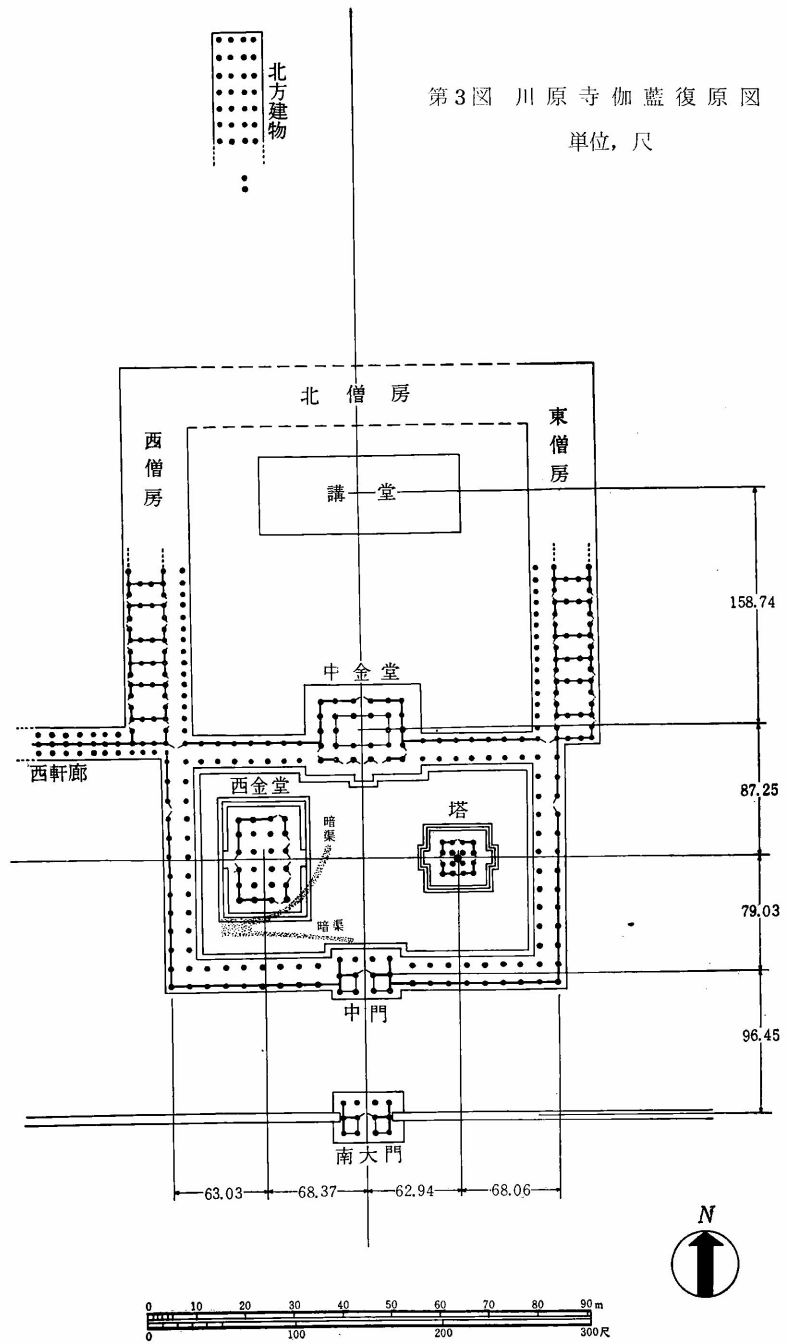
講堂周辺の破壊は予期以上はげしいものであつて、西方は沼、南、東、北の三方は幅3mにおよぶ濠が掘鑿されていた。わずかに北辺の



第2図 講堂全景(北より)

第3図 川原寺伽藍復原図

単位, 尺

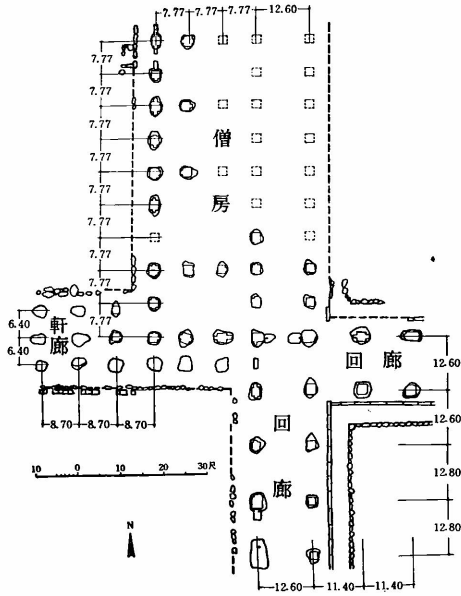


一部に講堂所用の瓦と思えるものの堆積が発見されたのみであった。その他には、南中央正面に掘立柱に仕合せた花崗岩製の唐居敷が見出された。これとて講堂に用いられたものと考えられないものである。

取付いていることが判明した。東側に現在の地形が一段低くなつているので当初より遺構の残存がややふまれたが、幸いにも内溝の底石と、礎石抜取痕跡をかううじて検出することに成功した。

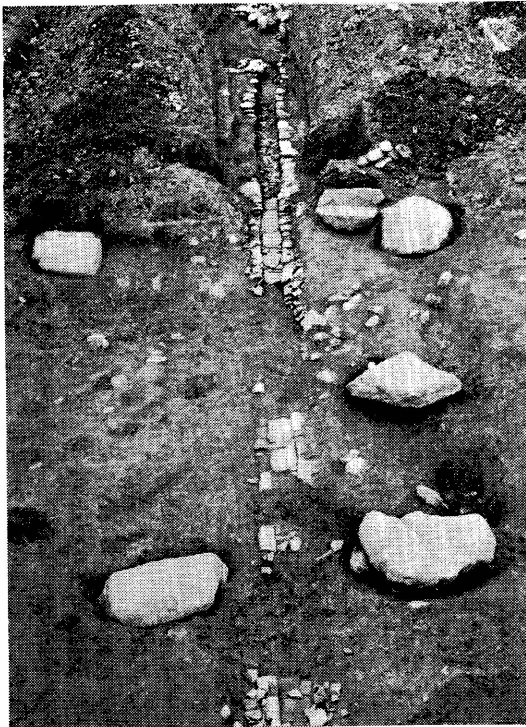
西半部については第一次調査の際に判明した西回廊に北接する部分

二 北回廊
 中門より発した回廊が塔・西金堂の外周を繞つてさらに北に行くものか、あるいは中金堂に取付くのかの究明も、今回の調査の目的の一つであった。このため中金堂の東西両側で回廊の有無を調査し、これが中金堂の南第一間に



第4図 西僧房実測図

を発掘し西回廊が東折することを発見、さらに北回廊西半部西端で3柱間を出すことが出来た(第4図)。この部分の保存状態は西回廊同様きわめて良好であつて、その南辺には凝灰岩の切石を用いた基壇と玉石を敷き並べた雨落溝が良く残り、北辺も凝灰岩切石を用いた基壇がみられた。北西の隅は唐居敷の石があつて、北に向つてひらく扉がもうけられている。南辺の雨落溝は幅1.2m(3.8尺)で、西回廊東辺の溝巾が0.9mであることよりも広く作られている。またこの南辺の溝と、西回廊東辺溝との交点から、西にこの水を排水する幅30cmの暗渠が作られていた。この暗渠は両側壁が瓦積で作られ、上を凝灰岩の切石でおおつていたらしい。



第5図 北僧房暗渠全景(南より)

第三次調査開始時に、東回廊の北の延長部分に凝灰岩を用いた基壇痕跡と数個の礎石を見出したので回廊はこの部分まで延長しているものと考え、これが西折して講堂に取付く部分を見出すことに苦労したが、結局は講堂には何等取付いていないことがわかつた。また、西回廊の北への延長部においては、西回廊に接して西回廊と同じ梁間をもつ西僧房の東第一間が検出され、北・西廊隅の間の扉は、西僧房への出入口と認められた(第4図)。そのため、前記の基壇痕跡と礎石は、東僧房のものとは推定され、東西両僧房が南北に長く、南で回廊に接し

三 僧 房

ていることがわかった。西僧房西側は礎石、地覆石、基壇なども保存が良好で、これによつて僧房の間取りまで復原し得るほどであった(第3図)。これによると僧房は基壇幅14.2m(47尺)その内側前面——講堂に面した側——に回廊梁間と同じ柱間3.8m(12.6尺)の吹放しの通路を通し、各室は奥行すべて3間2.3m(7.7尺)等間で、間口は中央に3間の一室を両側に2間の室を配したブロックが並ぶことがわかった。なほ、西僧房西側基壇の一部に、西方への通路部分とみられるものがあつたが、あるいは小子房に連るものかも知れない。北僧房については、前に記した講堂北側濠で徹底的に破壊され、さらにその後の水田の地下げによる破壊によつて、講堂北部では基壇痕跡すら認められなかつたが、東僧房の北端で、北僧房に相当する部分に、回廊の暗渠と同じ構造をもつ暗渠が南北方向に検出された(第5・6図)。これは北僧房基壇内の暗渠とも思われ、北僧房の存在を推定しうるものであつた。この結果、川原寺においては、講堂の三方に、三面僧房が存在したものである。

四 西 軒 廊

北回廊の西に延長した礎石列の存在はすでに大正14年の調査で知られていたが、それがどのような性質のものかは判断に苦しむものがあつた。それが今回の調査では桁行間別各2.63m(7.8尺)・梁行間別各1.93m(6.4尺)の複廊状の建物で、これが西僧房南妻と接しており、西に7間18.5m(61尺)以上続いた建物であることがわかつた。このことはこの複廊状の建物の西方にさらに建物のあることを予測させ、西の高



第6図 北僧房暗渠(南より)

くなつた部分からも瓦が出土すること、またこの西北に金堂の礎石にも匹敵するほどの大きな造出しのある花崗岩礎石が存在することともに、食堂、政所屋などのような附属建物が考えられ、今後とも究明しなければならぬことを示すものであらう。

五 北 方 建 物

北僧房よりさらに北の伽藍中心線より西に約23m(約77尺)・講堂より北に約82m(約270尺)板蓋神社の崖下の近くの地に礎石列があることが判明したので、礎石列の追求を行ったところ、ここにも南北に長い梁行3間7.2m(24尺)桁行6間20m(66尺)以上の建物が存在したこ

とがわかった。この部分は当初寺地内として予期しなかつたほど北に離れているが、出土の瓦類も中心部と変りなく、この建物の北に川原寺の瓦窯があるといわれているので川原寺の附属建物の一つであることが考えられる。

六 遺 物

遺物の点では第一次、第二次の調査で知られたものと全く同様の瓦類が多数出土したが、すべて平安後期までのもので、建久2年の火災では北半の施設が復旧されなかつたことを示している。ただ土釜その他日常土器類の多かつたことは僧侶の居住地区であつたことを示しているであろうか。

以上今回の調査で講堂を繞る大規模な三面僧房があり、その他に多数の附属建物の遺存を予測させられるにいたつたが、一応川原寺中枢部の調査を打切ることにした。これで三次にわたる発掘調査の終了をみたわけであるが、わが国上代伽藍の配置形式に新例を紹介し得たこと、現在知り得た最古の三面僧房の平面間取りを究明し得たことは、川原寺発掘調査の成果として斯界に資することであろう。寺院地北部で検出された北方建物は、川原寺の附属建物の一つと考えられるが、その性格は不明であり、他の附属建物とともに、今後の調査を俟ちたい。

(工藤圭章)